

## ある先生の思い出

伊藤 孝司(愛知大学大学院事務課)

大学の法学部で中国政治を専攻していた私は、将来に対する明確な考えもなく、大学院へ進学した。修士課程の二年間で進路についての答えを出すつもりだった。

文章を書く仕事になんとなくあこがれていた私は、大学の教員たちが論文を書く後ろ姿をずっと眺めていた。指導教授はさまざまな出版社からの原稿依頼に日々追われていた。自分にはとても真似できそうになかった。私は悩み続けたまま、二年間の猶予期間(モラトリアム)を終えた。結局、将来についての答えは出なかった。

大学院時代、自分の修士論文執筆とはあまり関係のない『大東亜(太平洋)戦争戦史叢書』(朝雲出版社刊)を、図書館書庫にこもっては読み耽っていた。修了に必要な単位数の関係で履修した「日本政治史特殊講義」の文献として、担当教員のA先生から読み方を手取り足取り教わった。

A先生は、一九三一年の満州事変に始まるアジア・太平洋戦争の専門家で、法学部長も務められた。特に、日本軍が中国大陸で行った阿片政策に関する資料を発掘して書かれた岩波新書は大きな反響を呼び、私も夢中で読んだ。

「日本政治史特殊講義」の授業は先生一人に対し、学生は私を入れて三、四名。『日中戦争従軍日記——輻重兵の戦場体験』や、『戦史叢書』の輪読を中心に進められた。先生の好きな中日ドラゴンズや時事的な話題で脱線することも多かった。

ある日、A先生は日本軍の阿片政策関連資料の入手経緯について話を始めた。

「伊藤君。研究者を目指すのならば、本屋は大事にきなさいよ。あの阿片に関する資料の存在は、古書店からの情報で知ったんだ」という言葉から始まった。

先生はうれしそうに、「まず、古書店に行ったら物欲しそうな顔をしちゃダメだ。古書店主は客の足元を見て値段をつり上げることもあるから、平静を装いなさい。掘り出し物を見つけたからって、うれしそうな顔をしちゃいけない」と続けた。

古書店での「作法」の数々を伝授し、「本屋は研究に必要なあらゆる情報を持ってきてくれる。とにかく、本屋は大事にきなさい」と念を押された。

大学院修了後、就職浪人をしていた私の就職を、A先生は常に気にかけてくださった。ようやく就職先が決まって上京すると、「文部省に来たついでだ」と言って、職場の玄関にA先生が立っていらっしやったこともあった。しかし、定年退職後、たった数か月で世界さされてしまった。私は何のご恩返しもできなかった。

何年か後、私は再び母校に戻り、学生時代に『戦史叢書』を読み耽った図書館が職場となった。館内でアジア・太平洋戦争に関する資料を見つけては終業後に読み耽り、そのたび、A先生の教えの一つ一つが耳によみがえってきた。

DH国際書房さんをはじめ、さまざまな書店や出版社の方々が大学に出入りする。本を売るため、出版企画のため、目的は様々だろう。私の勤務する大学だけでなく、他大学へも出入りする。「あの大学の〇〇先生がこういう研究をされていて、近く成果が出版される」、「××先生にこの企画で書いてもらうつもりだ」。学術研究に関するさまざまな情報が書店員や出版社員を介して大学間を飛び交う。

書店・出版社を介して流れる学術情報を的確に教員へ届け、研究成果を後世に残す。職業研究者にはなれなかったが、これも学術研究に関わる仕事。今もA先生の言葉が胸に響く。